

エベン・エゼル（助けの石）

2025年12月28日

サムエル記Ⅰ 7章1～17節
" 4章～7章

序：2025年激動の年
ここまで、主が私たちを助けてくださった
サムエルの時代のイスラエルを助け導かれた神は同じ神、永遠不変

I. サムエル登場の歴史的背景

出エジプト ～ カナン征服・定住 ～ 士師の時代 ～ 王制の時代

サムエル
4・1～7・17 最後の士師（さばきつかさ）
接点に立つ預言者

そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた（士師 21・25）

母ハンナの祈り・誕生・献児、幼少期から祭司エリのもとで生活（環境は不可）
神のことばを聞く（エリとエリの家にもたらされるさばき）、エリに告知

II. 神の箱をとおしてなされた神の御業

4章 (1)ペリシテ人との戦い

イスラエル敗北（4000人戦死）
神の箱をシロから運んで来る（お守りの効果を期待）
間違った期待に喜びが沸き起こるイスラエル
ペリシテ人は恐れとともに決死の勇気を奮い立たせる

(2)イスラエル敗北（歩兵3万人が死ぬ）

神の箱はペリシテ人に奪われ、エリの二人の息子ホフニとピネハスは戦死
その惨状を聞いて、エリは突然死、ピネハスの妻も子を産んで死ぬ
子の名「栄光はイスラエルを去れり」

5章 (3)奪われた神の箱

ペリシテ人は戦利品として神の箱をアシュドデの彼らの神ダゴンの宮に安置
翌朝、ダゴンは神の箱の前にうつ伏せに倒れていた
さらにその翌朝、ダゴンは頭と両腕が切り離され、胴体のみ残っていた

(4)主の御手の働き

アシュドデの人々：ねずみを感染源とする疫病で打たれ、パニック状況
ガテに神の箱を移動：ガテの人々も腫物で打たれた
エクロンに移動：町中に死の恐慌
7ヶ月間、ペリシテ人の野に放置された

6章 (5)神の箱をイスラエルに返還

占い師たちに、箱の返還の方法を相談
5つの金のねずみ（腫物の原因）を罪過のいけにえとして神の箱とともに送る
新しい車に乗せ、まだ乳離れていない子牛を持つ二頭の雌牛に引かせ、どこ
に行くかは牛たち任せ
子牛のところに戻りたい本能に抗ってまで、イスラエルの地に行く：災害は主から出た
そうでなければ偶然起こったこと

(6)ベテ・シエメシュへの帰還

祭司に与えられた町
二頭の雌牛は、鳴きながらも右にも左にもそれず、まっすぐ進んだ
ペリシテ人の領主たち：国境まで同行
（アシュドデ、ガザ、アシュケロン、ガテ、エクロン）
車はヨシユアの畑に着いた
神の箱を見て、ベテ・シエメシュの人々は喜び、車を薪とし、雌牛をいけにえ
として神にささげた
彼らは神の箱の中を見るという罪を犯し、主が70人を打たれたので服喪

7章 (7)キルヤテ・エアリムに運び上げられた神の箱
アビナダブの家に安置、彼の息子が守り手の任に就く 20年経過

神の箱は シロ ⇒ 戦場 ⇒ ペリシテの地 ⇒ イスラエルのベテ・シェメシュ ⇒
キルヤテ・エアリムのアビナダブの家 へと移った

III. サムエルが立てられ宗教改革

イスラエルは主を慕い求めていた ミツパに集合

(1)異国の神々、偶像を取り除き、主にのみ仕えよ

(2)とりなしの祈り

(3)断食と罪の告白

(4)全焼のいけにえ

(5)主の応え (サムエルの叫びに対し、雷鳴で応答)

ペリシテ人はイスラエルが祈りのために結集したのではなく、戦いのために結集したと誤解、戦闘を仕掛けてきた 主は轟く雷鳴で陣営を混乱させ、イスラエルに勝利をもたらされた

(6)民の応答：感謝の証 エベン・エゼルの石 (助けの石) を記念に立てた

(7)結果：ペリシテ人の侵入は止んだ
サムエル存命中は、イスラエルは主の御手に守られ続ける
ペリシテ人に奪い取られていた町々がイスラエルに戻った

IV. 適用

(1)信じられないほどの大敗北：それは罪の結果：神を信頼せず、罪を放置した結果
契約の箱は神ご自身ではない、神が聖なる臨在を現されるどころ
契約の箱を置きさえすれば……安全か？

(2)神の箱 (神) はひとりで戦われ、勝利をおさめられる (人間の共働は神の恵み)
人間を用いるとすれば、きよい人を用いる

(3)私たちの人生に、心の宮に神の箱を置くなら、内なるダゴンは倒れ、砕け、遠ざかる
キリストを王として迎えた心に、世というペリシテ人は太刀打ちできない

(4)神は人間も動物も彼らが知らないうちに、ご計画の成就のために備え、導く
動物の本能さえ、支配しておられる

(5)リバイバルの前段階：主を慕い求める機運
あらゆる偶像を離れ、主にのみ仕える
指導者=祈りの人 (必須条件)
断食・罪の悔い改め
信仰による祈りの継続
献身 (ささげもの)

神の応え